

評価結果報告書

地域密着型サービスの外部評価項目構成

I. 理念に基づく運営	項目数
1. 理念の共有	11
2. 地域との支えあい	2
3. 理念を実践するための制度の理解と活用	1
4. 理念を実践するための体制	3
5. 人材の育成と支援	3
II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援	2
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応	1
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援	1
III. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント	6
1. 一人ひとりの把握	1
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し	2
3. 多機能性を活かした柔軟な支援	1
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域資源との協働	2
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援	11
1. その人らしい暮らしの支援	9
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり	2
合計	30

事業所番号	2374000285
法人名	社会福祉法人 一誠福祉会
事業所名	グループホーム うらら
訪問調査日	平成 20 年 8 月 27 日
評価確定日	平成 20 年 9 月 24 日
評価機関名	特定非営利活動法人『サークル・福寿草』

○項目番号について

外部評価は30項目です。

「外部」の列にある項目番号は、外部評価の通し番号です。

「自己」の列にある項目番号は、自己評価に該当する番号です。参考にしてください。

番号に網掛けのある項目は、地域密着型サービスを実施する上で重要と思われる重点項目です。この項目は、概要表の「重点項目の取り組み状況」欄に実施状況を集約して記載しています。

○記入方法

[取り組みの事実]

ヒアリングや観察などを通して確認できた事実を客観的に記入しています。

[取り組みを期待したい項目]

確認された事実から、今後、さらに工夫や改善に向けた取り組みを期待したい項目に○をつけています。

[取り組みを期待したい内容]

「取り組みを期待したい項目」で○をつけた項目について、具体的な改善課題や取り組みが期待される内容を記入しています。

○用語の説明

家族等＝家族、家族に代わる本人をよく知る人、成年後見人などを含みます。

家 族＝家族に限定しています。

運営者＝事業所の経営・運営の実際の決定権を持つ、管理者より上位の役職者（経営者と同義）を指します。経営者が管理者をかねる場合は、その人を指します。

職員＝管理者および常勤職員、非常勤職員、パート等事業所で実務につくすべての人を含みます。

チーム＝管理者・職員はもとより、家族等、かかりつけ医、包括支援センターの職員等、事業所以外のメンバーも含めて利用者を支えている関係者を含みます。

1. 評価結果概要表

【評価実施概要】

事業所番号	2374000285		
法人名	社会福祉法人 一誠福祉会		
事業所名	グループホーム うらら		
所在地	愛知県新城市矢部字上ノ川一番地4 (電 話) 0536-22-4711		
評価機関名	特定非営利活動法人『サークル・福寿草』		
所在地	愛知県名古屋市中村区松原町一丁目24番地 N203号室		
訪問調査日	平成20年8月27日	評価確定日	平成20年9月24日

【情報提供票より】(平成20年 8月19日事業所記入)

(1) 組織概要

開設年月日	平成 17 年 4 月 16 日		
ユニット数	2 ユニット	利用定員数計	18 人
職員数	15 人	常勤 13 人, 非常勤 3 人, 常勤換算	10.2 人

(2) 建物概要

建物構造	単独型 鉄骨 造り 2階建て		
	2 階建ての	1 階 ~	2 階部分

(3) 利用料金等(介護保険自己負担分を除く)

家賃(平均月額)	45,000 円	その他の経費(月額)	20,000 円
敷 金	無		
保証金の有無 (入居一時金含む)	無	有りの場合 償却の有無	有/無
食材料費	朝食	円	円
	夕食	円	円
	または1日当たり	1,200 円	

(4) 利用者の概要(8 月 19 日現在)

利用者人数	18 名	男性 2 名	女性 16 名
要介護1	7 名	要介護2	2 名
要介護3	8 名	要介護4	0 名
要介護5	1 名	要支援2	0 名
年齢 平均	83.4 歳	最低 67 歳	最高 94 歳

(5) 協力医療機関

協力医療機関名	茶臼山厚生病院、山本歯科
---------	--------------

【外部評価で確認されたこの事業所の特徴】

新城市を一望に見渡せる高台にあるホームである。母体の特別養護老人施設のほかに、周りには老人保健施設、障害者施設、夜間休日診療所、保育園、シルバー人材センターがある。開設して満3年余、ホーム長を中心に、法人の理念「ノーマライゼーション」を根幹において歩んできた。利用者のペースで普通の生活ができるよう支援し、玄関に鍵はかけず、自由に外出できる環境整備も進めている。周りが福祉ゾーンで周囲から理解されやすいこともあり、利用者が他の施設に立ち寄ることもしばしばとのこと。終末期については、希望があればホームで最後まで看取る方針。また、入居時に母体の特養にも申し込み、身体状況に応じて移ることもできる。看護師を雇用し、看取りまで意識した最後まで安心できる体制となっている。

重点項目①	<p>前回評価での主な改善課題とその後の取り組み、改善状況(関連項目:外部4)</p> <p>主な改善課題として、①運営推進会議を活かした取り組み、②同業者との交流、③市町村との連帯などがあがっていた。①については、運営推進会議に民生委員らを積極的に招くことで、地域とのつながりが深まり、利用者が手縫いした雑巾をみやげに保育園や学校に訪問・交流するなど、新たな試みが始まっている。②の同業者との交流は、職員だけでなく利用者の交流も同時に進めており、今後が楽しみ。市町村との連帯やホーム便りの発行も前向きに少しずつ努力している。</p>
	<p>今回の自己評価に対する取り組み状況(関連項目:外部4)</p> <p>自己評価は非常勤を含めすべての職員が全項目を各自で書き込むことで、日々出来なかったことや問題点を改めて見つめ直し、原因の追及を全員で行うという、良い契機となっている。問題意識を各職員が抱くようになり、行動につながることで、自主的に楽しい仕事ができるようになってきた。年に一度、全員で自己評価を行うことをうまく活かし、介護支援の改善につながっている。</p>
重点項目②	<p>運営推進会議の主な討議内容及びそれを活かした取り組み(関連項目:外部4, 5, 6)</p> <p>運営推進会議の出席者は、地元区長、北部地区の民生副会長、地元民生委員、婦人会長、社協、利用者、家族、ホーム側2名である。新たな取り組みとして、利用者家族全員に運営推進会議への出席を求め、1/3の出席が得られた。ホームの「みんなが納得して、みんなで活動する」という姿勢の表れであり、利用者、職員、家族が、それぞれのできる力を出し合って豊かな生活を造っていく日常の活動につながっている。運営推進会議を契機に、参加者からボランティアとして参加したいとの申し出があるなど、家族や地域を結びつける役割も果たしている。</p>
	<p>家族の意見、苦情、不安への対応方法・運営への反映(関連項目:外部7, 8)</p> <p>家族の意見、苦情、不安をどう受け止めるかについては、苦情の窓口は管理者に一本化し、対応と結果責任のありかが目に見える形にしている。なるべく顔を見て、話をし、お互いの理解を深める機会を増やしたいと、毎月の利用料はホームでの手渡しを基本とし、運営推進会議にもすべての家族に参加を呼びかけている。また家族が訪ねてきた時にはお茶を出し、食事時には一緒に食事をとってもらうなど、楽しい語らいの中で何でも話せる関係づくりをしようと努力している。</p>
重点項目④	<p>日常生活における地域との連携(関連項目:外部3)</p> <p>外部の者にとっては、なかなか溶け込みづらい一面もあるが、ホームとしては無理をしたり、急いだりせず、利用者と小学校や保育園に出かけるなど、少しずつ地域に出て行く機会を設けながら、地域住民と触れ合うように努めている。また、ホームが新城市の福祉ゾーンの中に位置しているという特色を活かし、近隣の福祉施設職員と交流したり、お互いに連携を深めていくことで、安心して利用者が福祉ゾーンを散策できる見守り体制をいっている。</p>

2. 評価結果(詳細)

(☐ 部分は重点項目です)

取り組みを期待したい項目

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
I. 理念に基づく運営					
1. 理念と共有					
1	1	○地域密着型サービスとしての理念 地域の中でその人らしく暮らし続けることを支えていくサービスとして、事業所独自の理念をつくりあげている	ホームの理念として、「笑いがある、快地良い、安心がある」をモットーに、「お天道様とともにある、自然なあたりまえの生活ができる」よう、支援するのが目標。毎日が普通の生活となり、利用者皆が楽しさ・こころよさを感じることができるよう、開設以来、たゆまぬ努力を続けている。		
2	2	○理念の共有と日々の取り組み 管理者と職員は、理念を共有し、理念の実践に向けて日々取り組んでいる	ホーム長を中心にして「笑・快・安」の3つの理念を実現するために開所以来努力してきた。3年たち、ホーム長主導の運営から、主体が職員に移ってきた。職員に理念が浸透し、その実現のためにどう動くかを自主的に考える意識が育ったからだ。理念の実現の具体化が期待される。		
2. 地域との支えあい					
3	5	○地域とのつきあい 事業所は孤立することなく地域の一員として、自治会、老人会、行事等、地域活動に参加し、地元の人々と交流することに努めている	新都市の福祉ゾーンの中にあり、近隣に福祉施設が集まっている地域性を活かし、利用者が他施設に遊びに出かけたり、毎日散歩をするのを職員同士で連携して見守る体制を整えている。住宅街は離れているが、地域の行事に参加するなど、住民との交流も大切にしている。		
3. 理念を実践するための制度の理解と活用					
4	7	○評価の意義の理解と活用 運営者、管理者、職員は、自己評価及び外部評価を実施する意義を理解し、評価を活かして具体的な改善に取り組んでいる	全職員が自己評価票の全項目を書き込むことで、自分たちがしてきたことを振り返り、前に進むための良い契機として活かしている。自己評価への取り組みは、介護の質を意識するなど、職員の意識をあげ、職員の自主性を引き出している。またそこから具体的な改善にも繋がっている。		
5	8	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	運営推進会議の出席者との関係を大切にすることで、地域との連携を深めるのに役立っている。今年度は家族全員に参加を呼びかけ、家族との関わりも深めた。ホームでは利用者と家族が主役で、職員は脇役とし、できるだけ家族にも運営に参加してもらうよう心がけている。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
6	9	○市町村との連携 事業所は、市町村担当者と運営推進会議以外にも行き来する機会をつくり、市町村とともにサービスの質の向上に取り組んでいる	市との連携を求めて、運営推進会議への参加も要請しているが、まだ出席はえられていない。地域包括支援センターとの連絡はあるが、行政との日常的な係わりあいには、まだこれからである。ホームとしてはあせらず時間をかけて、少しずつ進めることができればと考えている。		
4. 理念を実践するための体制					
7	14	○家族等への報告 事業所での利用者の暮らしぶりや健康状態、金銭管理、職員の異動等について、家族等に定期的及び個々にあわせた報告をしている	利用者の暮らしぶりや、健康状態について、金銭管理などの報告書にコメントとして書き、毎月1回、家族がホームに支払いにみえる時に、顔を見ながら口頭でも伝えている。また、利用者に体調変化が見られた時など、急変時には、こまめに電話をかけ、家族に詳細に連絡している。		
8	15	○運営に関する家族等意見の反映 家族等が意見、不満、苦情を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	家族の意見、不満、苦情を受け止めやすくするために、家族との関係を大切に考え、家族が訪問しやすい雰囲気づくりを心がけている。運営推進会議にも家族に出席してもらい、それを契機に敬老会は家族が主催するなど、家族が運営にかかわれるようなサポートを始めている。		
9	18	○職員の異動等による影響への配慮 運営者は、利用者が馴染みの管理者や職員による支援を受けられるように、異動や離職を必要最小限に抑える努力をし、代わる場合は、利用者へのダメージを防ぐ配慮をしている	ホームの人事は、社会福祉法人「一誠福祉会」が法人として決めるため、職員の異動は避けられない。そのため、あえてユニットごとに職員を固定せず、顔なじみを増やすことで、職員の異動や離職によるダメージを最小限に抑え、引き継ぎがスムーズにできるよう努力している。		
5. 人材の育成と支援					
10	19	○職員を育てる取り組み 運営者は、管理者や職員を段階に応じて育成するための計画をたて、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	母体である法人組織として、新人研修や職員の養成研修があり、基本的な介護技術などは、そこで体系立てて取得できる。またホーム内で、毎日30分の会議を実施。コーチングを取り入れ、ホーム長の指示は最小限にとどめながら、職員が自立的に考えて行動できるよう育成している。		
11	20	○同業者との交流を通じた向上 運営者は、管理者や職員が地域の同業者と交流する機会を持ち、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	課題だった同業者との交流を始め、今年は年2回行った。特徴的なのは、職員間だけの交流にとどめることなく、利用者を含めた交流を行っていること。お互いの施設を、利用者中心とした全員参加の形で訪れることで、職員にも利用者にもいい影響が出ている。	○	現在は、市内に3施設ある同業者のうち、2施設間で交流している。今後は交流の輪を広げ、3施設間で交流の機会を持つように努め、継続してサービスの質の向上につなげていくことに期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
Ⅱ.安心と信頼に向けた関係づくりと支援					
1. 相談から利用に至るまでの関係づくりとその対応					
12	26	○馴染みながらのサービス利用 本人が安心し、納得した上でサービスを利用するために、サービスをいきなり開始するのではなく、職員や他の利用者、場の雰囲気徐々に馴染めるよう家族等と相談しながら工夫している	入居希望の相談を受けると、家族と、本人にホームを見学してもらうことにしている。本人が見学を訪れ、お茶を飲んだりしながら、職員と顔なじみになることで、共同生活への準備を行っている。入居前の生活や、今まで受けていたサービスなど、入居希望者の事前の情報をつかむことを重視し、利用者には納得してもらえるよう接している。		
2. 新たな関係づくりとこれまでの関係継続への支援					
13	27	○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、一緒に過ごししながら喜怒哀楽を共にし、本人から学んだり、支えあう関係を築いている	昼食づくりは利用者全員で、2時間弱ほどかけて作る。女性の利用者は包丁を使って野菜を調理し、男性の利用者は炊飯器からご飯を移し替えたり、食器に盛りつけるなど、できることで参加。職員が時々応援しながら、1汁、3品のおかずと、つけもの、ご飯をつくり、全員で楽しく昼食をいただいた。共に支えながら過ごす大切なひと時だ。		
Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント					
1. 一人ひとりの把握					
14	33	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居時に家族等から暮らしの希望、意向を聞くと共に、自分史を作成してもらい、ケアに活かしている。また、センター方式の「本人の願い」欄を作成。利用者の言葉の端々から、好みや願いを捉えて記載し、それを職員全員で共有しながら、日々の支援に活かしている。		
2. 本人がより良く暮らし続けるための介護計画の作成と見直し					
15	36	○チームでつくる利用者本位の介護計画 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映した介護計画を作成している	入居時の聴き取り資料やアセスメント資料を参考に、それぞれの担当職員が相談しながらケアプランを作成している。利用者個々のできること、できないこと、何が課題で、解決するためにどんな支援をするのかをミーティングで確認し、個々に適した介護計画に反映するよう努めている。		
16	37	○現状に即した介護計画の見直し 介護計画の期間に応じた見直しを行うとともに、見直し以前に対応できない変化が生じた場合は、本人、家族、必要な関係者と話し合い、現状に即した新たな計画を作成している	定期的な見直しは6か月に1回行っている。利用者に状態変化や問題が生じた場合は、その都度ミーティングで話し合い、家族等にも報告して相談しながら、常に現状に即した計画となるよう、介護計画の見直しを実施している。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
3. 多機能性を活かした柔軟な支援(事業所及び法人関連事業の多機能性の活用)					
17	39	○事業所の多機能性を活かした支援 本人や家族の状況、その時々要望に応じて、事業所の多機能性を活かした柔軟な支援をしている	母体組織がホームの隣で特養を運営しており、身体状況が悪化し、ホームでケアができなくなった場合は、優先的に利用できる体制になっている。広大な福祉ゾーンの一部に位置するため、毎日の散歩や自由な外出時に、他施設の介護職員にも利用者を気にかけてもらい、支援し支え合う関係を構築している。		
4. 本人がより良く暮らし続けるための地域支援との協働					
18	43	○かかりつけ医の受診支援 本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	利用者本人のことをよく理解している医師から医療が受けられるよう、入居前からのかかりつけ医に受診できるよう家族に協力をお願いしている。家族に用があり同行できない場合は、職員が家族の代わりに付き添い、適切な医療を受けられるよう支援している。		
19	47	○重度化や終末期に向けた方針の共有 重度化した場合や終末期のあり方について、できるだけ早い段階から本人や家族等ならびにかかりつけ医等と繰り返し話し合い、全員で方針を共有している	重度化した場合のケアは入居時に確認し、その後も、状況、状態が変わるたびに、家族と頻繁に話し合っている。また、主治医、家族の意見を聞き、希望者にはホームでの看取りを行った経験もある。夜間などの緊急時には、協力病院に受け入れてもらう体制もできている。		
IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援					
1. その人らしい暮らしの支援					
(1)一人ひとりの尊重					
20	50	○プライバシーの確保の徹底 一人ひとりの誇りやプライバシーを損ねるような言葉かけや対応、記録等の個人情報の取り扱いをしていない	人生の先輩である利用者に対して、人間として年齢を重ねた方にふさわしい言葉遣いを徹底し、本人の誇りを尊重したケアを行なっている。個人情報の記載された書類は、誰にでも目に付く所には放置せず、事務室の引き出しの中にしまうように徹底されている。		
21	52	○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	職員の決まり、都合等を優先することなく、あくまでも利用者本位の暮らしを徹底している。起床、就寝、三度の食事、入浴等、固定したスケジュールを決めず、それぞれ利用者のペースを重視。朝寝坊したい人は時間で起こさず、10時頃に朝食を出すなど臨機応変に支援している。		

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取組んでいることも含む)
(2) その人らしい暮らしを続けるための基本的な生活の支援					
22	54	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	訪問時には、昼食の準備は職員とできる利用者が全員で行っていた。食材を切ったり、煮たり、配膳したり、それぞれが役割を持ち、楽しく行っていた。食事に変化を持たせるため、毎週木曜日は弁当、月1回は誕生食を準備するなど工夫し、利用者が食を楽しめるように支援している。		
23	57	○入浴を楽しむことができる支援 曜日や時間帯を職員の都合で決めてしまわずに、一人ひとりの希望やタイミングに合わせて、入浴を楽しめるように支援している	利用者の希望に沿うよう、入浴は毎日でも可能。入浴時間も15:30～21:00と幅があり、それぞれ利用者に合わせたペースで、ゆっくり楽しめるよう支援している。入浴を拒む方には、足湯や清拭などを行い、無理なく入れるよう工夫しながら清潔を保持。入浴時の安全性も確保している。		
(3) その人らしい暮らしを続けるための社会的な生活の支援					
24	59	○役割、楽しみごと、気晴らしの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、楽しみごと、気晴らしの支援をしている	食事づくり、片付け、清掃、洗濯干し等、それぞれが得意なことで役割を持ってもらっている。日常の楽しみとして、スーパーでの買い物、喫茶店での昔話、ドライブなどを実施。今年から、飯田線を利用する電車でお出かけに取り組み、職員と少人数で遠出する支援も始まっている。		
25	61	○日常的な外出支援 事業所の中だけで過ごさずに、一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援している	朝夕の散歩を日課としている。利用者の能力に合わせて、何組かに分けてそれぞれ職員が同行している。一人で行動できる方は緊急連絡先の名札を付けて、自由に外出を楽しむことも。それ以外の方は職員と一緒に、買い物にスーパーに行くなど、外出の機会を持つようにしている。		
(4) 安心と安全を支える支援					
26	66	○鍵をかけないケアの実践 運営者及び全ての職員が、居室や日中玄関に鍵をかけることの弊害を理解しており、鍵をかけないケアに取り組んでいる	「いつでも出て行ける安心感を大切にする」というホームの方針で、日中は鍵はかけず、いつでも、どこにでも出掛けられる支援体制をとっている。玄関の出入りは職員が把握しやすいよう設計され、安全性と自由を確保するため、外出の場合は職員が後からついていき見守っている。		
27	71	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を身につけ、日ごろより地域の人々の協力を得られるよう働きかけている	避難訓練は定期的に、隣の特養と合同で行なっている。地震対策として、食品棚などの大型家具の固定、ガラス扉等の飛散防止フィルム張り等を行なっている。ご近所の特養、老健とは協力関係を築いており、特に隣の特養からは災害備蓄品が借りられる支援体制になっている。	○	夜間は職員が一人になるので、夜間災害時の対応についても話し合っておく必要がある。ホーム単独の避難訓練を夜間に試行してみるのも、いざという時の体制を見直す良い機会となると思われる。今後は、特養、老健との協力関係をさらに強めるよう期待したい。

外部	自己	項 目	取り組みの事実 (実施している内容・実施していない内容)	(○印)	取り組みを期待したい内容 (すでに取り組んでいることも含む)
(5)その人らしい暮らしを続けるための健康面の支援					
28	77	○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事は毎食、主菜、副菜2品、汁物を必ず付けることで、多種・多様な食材を摂取できるようにし、一日全体で栄養や水分量がおおよそわかるようにしている。夜間はペットボトルにお茶を入れ、ベッド横の定位置にセットすることで、水分摂取が利用者の習慣となるよう支援している。		
2. その人らしい暮らしを支える生活環境づくり					
(1)居心地のよい環境づくり					
29	81	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間（玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等）は、利用者にとって不快な音や光がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	食堂、居間には季節の花が飾っており、共用の空間には鉢植えの植物を多数置くことで、緑が身近にある落ち着いた雰囲気的环境を整えている。また消臭器を取り付け、いやな臭いがないように心がけている。目隠しとなる間仕切りなどを使うことで、居心地の良い空間も演出している。		
30	83	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのもを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	居室には各自好みの使い慣れた、筆筒、椅子などを持ち込んでもらうことで、一人ひとりの居場所となるよう支援し、居心地の良い生活空間を作っている。また、居室の入り口には好みの暖簾が掛けてあり、ドアも区別し易いように色をそれぞれ変え、自室を識別しやすくしている。		